

乳幼児相談室 1 歳児活動案

指導者 手塚 清貴

1 活動「朝の活動」

2 活動の趣旨

乳幼児期は、基本的な親子関係が形成される時期である。安定した親子関係の中で子どもが保護者の愛情に包まれながら健やかに育つことを願い、支援に取り組んでいる。そのため、本校の乳幼児相談室では、親子での活動を通して楽しみながら、子どもの気持ちを受け止められる経験ができるように支援を行っている。保護者や指導者が子どもの心の動きや表現したいことを即時的に捉え、共感して関わることで子どもが自発的にコミュニケーションを取ろうとする心を育てていきたい。

1 歳児の大きなねらいは、子どもが父母への愛着を十分に表現し、保護者がそれを愛おしいと思って関わることにあると考える。親子で共感し合ったり、同じ体験を通して伝え合おうとしたりしている。活動は、週に 1 回のグループ活動と月に 1 回の個別懇談を行っている。自由遊び、片付け、朝の歌、手遊び歌、ダンス、名前呼び、絵本の読み聞かせ、設定遊びなどを中心に行っている。季節や行事に関連した遊びも取り入れて活動している。子どもの心身の発達の様子や聴力については個人差が大きい。保護者同士の関係は良く、友達同士で関わる姿を喜び合ったり、他の子どもの様子を見て褒めたり、一緒に遊んだりする様子も見られる。人見知りの時期にある子どもは、母から離れられないこともあるが、成長するとともに少しずつ行動範囲が広がってきている。また、子どもが困ったときには、すぐに母の元に戻り気持ちを安定させることができている親子もいるが、なかなかコミュニケーションが取れずに子どものうしろからついていき見守る親もいる。子ども達は、友達の遊びに興味をもち、場を共有しながら遊ぶことが増えている。

本時では、子どもの小さな表現を受け止め、気持ちに寄り添った関わりを心掛けたい。「楽しいね。」「上手だね。」「面白いね。」など親子が楽しさや喜びを共有し、共感できることで、保護者には気持ちが通じ合う心地良さを、子どもにはやり取りの楽しさを感じてほしい。なかなか活動に参加することが難しかったり、興味がなく他のことに目を向ける子どもがいても保護者と見守ったり、活動に誘ったりしながらやりとりする経験をさせたい。設定遊びでは絵の具遊び（野菜スタンプ）を行う。身近な素材を使って親子で遊び、親子で関わったり、友達の様子を見たりして楽しめるようにしたい。支援者と遊ぶのではなく、親子での小さなやりとりをつなぎながら活動を進めていけるようにしたいと考える。日頃から、のりやクレヨン等が手に付くとすぐに拭いたり洗ったりする子ども達が多い。そのため、野菜を準備して、野菜を触りながらスタンプし、絵の具遊びに広げていきたいと考えた。

3 本時の目標

（子ども）保護者とやり取りを楽しむことができる。

（保護者）子どもの表現を受け止め、やり取りを楽しむことができる。

（支援者）保護者が子どもの表現を受け止め、楽しい気持ちを伝え合えるように支援する。

4 本時の展開例

予想される活動	支援者の活動	親子の活動	支援と配慮事項
自由遊び (10:00 ～)	・ 親子での活動を促す。 ・ お片付けの曲を弾く。	・ いろいろな遊具で遊ぶ。 ・ 片付けをする。	・ 子どもの遊びを人と関わりのある遊びに広げるようにする。 ・ 家庭での出来事や病院受診後の経過などがあれば適宜懇談する。
朝の挨拶 (10:30 ～)	・ 活動が始まることを伝え、親子で輪になって歌うように伝える。	・ 朝の歌を歌う。	

手遊び歌 (トントントント ントンひげじ いさん)	・トントントント ひげじいさんを歌 うことを伝える。	・親子で手を顎にあて たり、ほっぺにあて たりしながら歌う。	・T 1 が全体進行をしなが ら、T 2、3、4 は、保 護者支援やモデリングを しながら親子の活動を拡 げる。 ・子どもの行動や要求した いことを表現できるよう に促す。 ・親子での伝え合いが動作 だけではなく、手話や音 声言語で伝えることがで きるように促す。 ・遊びを嫌がったり、別の 遊びをしたいと離れる子 どもがいるときには、保 護者に寄り添いながら様 子をみて言葉がけをして いく。
ダンス (からだ☆ダ ンダン)	・テレビを準備する。 ダンスの映像を流 しながら一緒に踊 る。	・テレビの映像を見な がら一緒に踊る。踊 らず座ってみてい ても良い。手を動かし たり、リズムにのっ て揺れたりする。	・遊びを嫌がったり、別の 遊びをしたいと離れる子 どもがいるときには、保 護者に寄り添いながら様 子をみて言葉がけをして いく。
トイレや水分 補給の時間	・トイレや水分補給 をするように伝え る。	・トイレに行くことが できる場合は、親子 で行くようにする。 (トイレが終わった ら、ひよこ組の教室 に行く。親子でマー クを確認しながら、 椅子を準備する。)	・トイレに行くように促 す。座ってみたり、おし っこはないよと言った り、それぞれの段階に合 わせて言葉がけをする。
名前呼び	・写真カードを見せ ながら名前を呼ぶ。	・名前を呼ばれたら、 カードを受け取り、 ひよこ組のホワイト ボードに貼る。	
絵本読み	・「ゆびすうじ」の 絵本を読む。	・絵本や読み手を見て 聞く。 ・一緒にまねをしなが ら楽しむ。	・模倣がようやく増え始め ている子ども達なので、 本を読みながら自分から 表現することができるよ うに促したい。まずは、 手話表現を見ているだけ の段階から、模倣ができ ようになる最終的に は、「1」の指を出すと ／おに／と自発的に表現 できるまで繰り返し読ん でいきたい本である。
設定遊び (絵の具遊び)	・(ホールへ移動する ように伝える。) ・みんなでブルーシ ートを敷くことを 伝える。 ・長く繋げた模造紙 と野菜を見せ、ス タンプすることを 伝える。	・(椅子を片付けてホー ルへ行く。) ・親子でシートの端を 持って広げる。 ・模造紙や野菜に興味 をもつ。	【準備する物】 ・絵の具、野菜、ローラー、 模造紙 ・絵の具が付くのを嫌がる 子どもには、スタンプを する様子を見せたり、少 し大きめの野菜でスタン プする事を促したり、ロ ーラーなどで遊ぶことか ら始められるようにす

シール貼り	- 絵の具を用意して、スタンプをしてみせる。 - シールを貼るように促す。	- 親子で野菜スタンプをしたり、手に絵の具を付けて絵を描いたりする。 - シールをもらい、カードに貼る。	- る。 - 擬態語をたくさん支援者が言葉にしながら保護者に話しかける。 - 支援者と個別に関わりながら、シールを選び貼るように促す。
さよならの歌	- 手をつないで、円を作るように促す。 - さようならの歌を歌うように伝える。 - 子どもたちを抱っこする。	- 手をつないで、さようならの歌を歌う。 - 先生やお母さんたちに抱っこをしてもらう。	

5 本時の評価

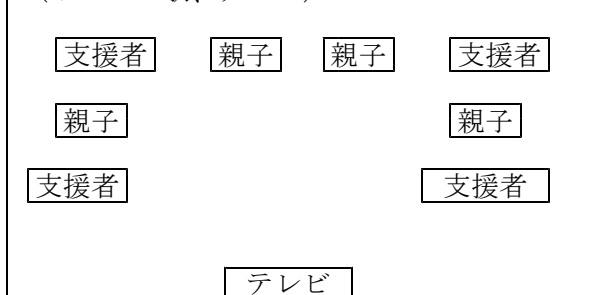
(子ども) 保護者とやり取りを楽しむことができたか。

(保護者) 子どもの表現を受け止め、やり取りを楽しむことができたか。

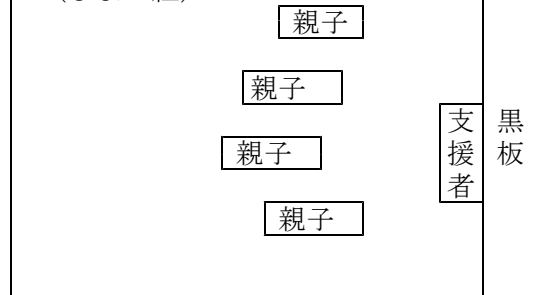
(支援者) 保護者が子どもの表現を受け止め、楽しい気持ちを伝え合えるように支援できたか。

6 教室の環境

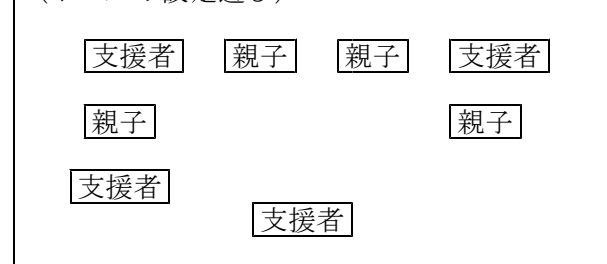
(ホール：歌、ダンス)



(ひよこ組)



(ホール：設定遊び)



乳幼児相談室 2 歳児 活動略案

日 時：令和 6 年 1 1 月 7 日（木）

1 0 : 0 0 ~ 1 1 : 3 0

場 所：乳幼児相談室（うさぎ組）

対 象：2 歳児の親子

指導者：小笠原 悠佳（T3）

牧 薫（T1）

手塚 清貴（T2）

宇野 瑞江

1 本時の目標

- ・（子ども）保護者や指導者とやりとりを楽しむことができる。
- ・（保護者）子どもの表現を受け止め、やりとりを楽しむことができる。
- ・（支援者）保護者が子どもの表現を受け止め、楽しい気持ちを伝え合えるように支援する。

2 展開

予想される活動	指導者の活動	親子の活動	支援と配慮事項
自由遊び	・親子での活動を促す。 ・片付けの曲を弾く。	・様々な遊具で遊ぶ。 ・片付けをする。	・子どもの遊びを友達同士で関わり合う遊びに広げるようにする。 ・家庭での出来事や病院受診後の経過などあれば適宜懇談する。
朝の挨拶 (10 : 30 ~)	・親子で輪になって歌うように伝える。	・朝の歌を歌う。	
歌遊び 「一匹の野ねずみ」	・一匹の野ねずみを歌うことを伝える。 ・野ねずみのペープサートを提示する。	・手遊びをしながら野ねずみ一匹を歌う。	・T 1 が全体進行をし、他の指導者は保護者支援やモデリングをしながら親子の活動を広げる。
ダンス 「どうぶつたいそう」	・たいそうをすることを伝える。 ・テレビの準備をする。	・どうぶつたいそうを踊る。	・親子の伝え合いが動作だけではなく、手話や音声言語で伝えることができるように促す。
トイレ・水分補給	・トイレに行くことができるように促す。	・トイレに行く。 ・水分補給をする。	・子どもの行動や要求したいことを表現できるように促す。
名前呼び	・名前カードを見せながら名前を呼ぶ。	・うさぎ組に移動する。 ・自分のマークの椅子を準備して座る。 ・自分の名前カードを	・遊びを嫌がったり、別の遊びをしたいと離れたりする子どもがいる時には、保護者に寄り添い

絵本読み 「おふろで じゃぶ じゃぶ」	絵本を読む。	指導者に渡す。 - 名前を呼ばれたら返事をし、名前カードを黒板に貼る。 - 指導者や友達とハイタッチをする。 - 絵本や読み手を見て聞く。 - 一緒に手を動かしながら楽しむ。 - 登場人物や情景について話しながら聞く。	ながら様子を見て言葉がけをしていく。 - T 2 は日本手話、T 1 は音声日本語で読み聞かせをする。 - モデリングや言葉がけをしながら、親子の活動を広げる。
設定遊び (トイレットペーパー遊び)	- 椅子を片付けてホールへ移動させる。(ホールにブルーシートを敷き、たらいを準備する。) - トイレットペーパーを教材箱から出す。 - 指導者が少しずつ遊びを展開する。	(椅子を片付けて、ホールへ移動する。) - トイレットペーパーをもらう。 - 親子でトイレットペーパーを使って転がしたり、長く伸ばしたり、ちぎったり様々な遊びをする。	【準備する物】 - トイレットペーパー、ブルーシート、たらい、じょうろ(水) - 保護者が子どもと関われるよう、遊び方を展開したり、擬音語をたくさん言葉にしたりしながら保護者に話しかける。
シール貼り	- シール帳を持ってくるように伝える。 - 日にちを確認し、シールをあげる。	- シール帳をもって、指導者のもとへ行く。 - 今日の日にちを確認し、シールを貼る。	指導者と個別に関わりながら、シールを選び貼るように促す。

3 本時の評価

- ・(子ども) 保護者や指導者とやりとりを楽しむことができたか。
- ・(保護者) 子どもの表現を受け止め、やりとりを楽しむことができたか。
- ・(支援者) 保護者が子どもの表現を受け止め、楽しい気持ちを伝え合えるように支援できたか。

3学年 LHR・自立活動 指導略案

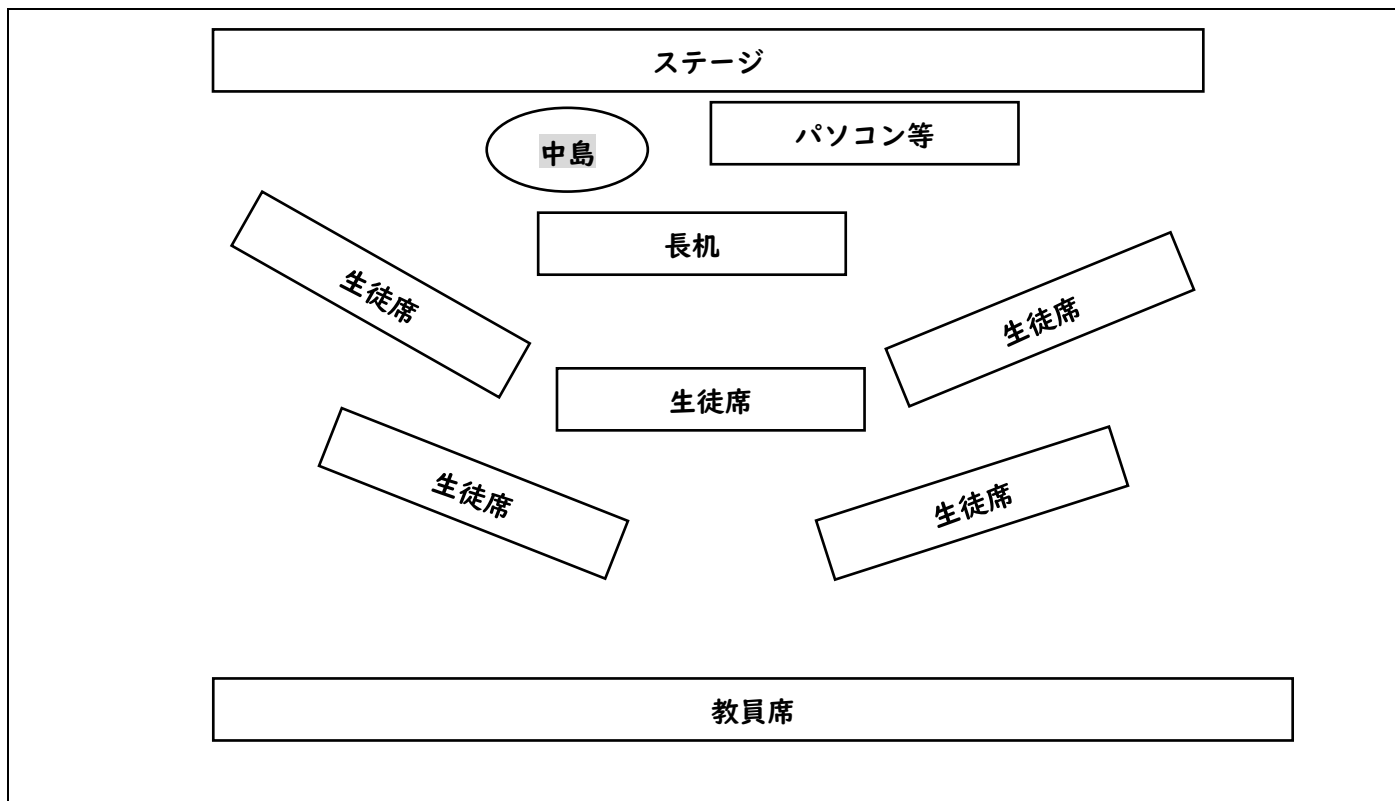
単元名 「コミュニケーション」	授業日 令和6年12月2日(月)1時間目
	場所 体育館
教員 MT: 中島 ST 中村t(必要に応じて手話通訳)	

目標 ・ルールとマナーの違い、モラルについて理解することができる。 ・スマホの正しい使い方について理解することができる。
--

学習の流れ(展開)

授業展開(時間)	指導内容	配慮事項
8:50～	1 あいさつ ・担当の号令で挨拶をする。	・PP で説明
8:51～	2 本時の内容 ・本時の内容を説明する。 ① 学習計画の確認(全9回) ② ルールとマナーの違い、モラルについて ③ スマホの正しい使い方について ④ 振り返り	
8:55	3 ①学習計画の確認(全9回) ・本時の学習目標を確認する。 ・全9回の学習計画を知る。	・プリントを配布する ・ルール、マナー、モラルについて生徒を指名し、発表させる
9:00	4 ②ルールとマナーの違い、モラルについて ・ルール、マナーについて指名された生徒は自分の考えを発表する。 ・ルールとマナーについてプリントの穴埋めを記入する。 ・ルールとマナーの違いを確認する。 ・モラルについて指名された生徒は自分の考えを発表する。 ・モラルについてプリントの穴埋めを記入する。	
9:15	5 ③スマホの正しい使い方について ・PPのスライドを見ながら、正しい使い方について学習する。 ・プリントの穴埋めをスライドを見ながら記入する。	
9:35	6 振り返り ・本時の学習の感想をプリントに記入する。	
9:40	7 あいさつ、片付け ・担当の号令で挨拶をする。 ・全員で片付けを行ってからから、教室に戻る	・記入後、中島に提出させる

○配置図(体育館)



令和6年度 3学年 LHR・自立活動 指導計画

令和6年11月11日

1. 単元名

「コミュニケーション」

2. 単元目標

- ・情報機器の使用に関して、マナーやモラルを身に付ける。
- ・正しい挨拶や言葉遣いを身に付け、望ましい人間関係を築く。
- ・相手に伝わるコミュニケーション方法の選択や互いに確認しあうことの重要性を理解する。

3. 担当

○中島、中村、松島、山内、木村、及川

4. 学習計画 (全9回)

実施日	学習内容	備考
12月2日(月)	○ルールとマナーの違い、モラルについて ○スマホの正しい使い方について①	・ルールとマナー違いを例を参考に学習する。 ・PPを見ながら学習する。 ・トラブル事例を参考に学習する。
12月5日(木)	○スマホの正しい使い方について② ・情報モラルかるた	・グループごと実施後、実際に自分が経験した内容の絵札・読み札について話し合う。
12月9日(月)	○ビジネスマナーを理解しよう① ・ビジネスマナーがなぜ必要なのか考えることができる。	・ビジネスマナーについて例を参考に学習する。
1月20日(月)	○ビジネスマナーを理解しよう② ・正しい言葉遣いが分かって、言えることができる。	・ビジネスマナー会話、距離感について。 ・接客7代用語について。
1月23日(木)	○聴覚障がいについて ・聴覚障がいかるた	・グループごと実施後、実際に自分が経験した内容の絵札・読み札について話し合い、発表する。
1月27日(月)	○社会生活でのコミュニケーション① ・会話のキャッチボール	・他者とのコミュニケーションがうまくいかない理由を「キャッチボール」に例えて行う。
1月30日(木)	○社会生活でのコミュニケーション② ・相手に伝わるコミュニケーション方法を選択できる。	・どの場面でどんなコミュニケーションが必要なのか、またのぞましくないのか、具体的な場面を想定して考えていく。
2月3日(月)	○社会生活でのコミュニケーション③ ・互いに確認しあうことの重要性を理解、習慣化できる	・日常生活で起こりえるトラブル場面でのコミュニケーションについて、グループごと話し合い、発表する。
2月6日(木)	○学習の振り返り	・単元の振り返り

① 題設定理由

所属している学年は、言動に幼さを感じるところがあり、集団活動を通しての望ましい人間関係を築く必要がある。また、情報機器に関してのマナーやモラル等の理解が不十分な生徒がおり、いじめにつながる可能性もある。自分の意見を適切に表現する方法や、互いの意見を尊重する態度を身に付け、互いを理解し、思いやる心と仲間意識を育てたいと考え、設定した。

② 実践内容

学年の LHR の時間に、「コミュニケーション」という単元で授業を行う。単元目標の中に、情報機器に関するマナーやモラル、望ましい人間関係、適切なコミュニケーションを取り上げ、いじめの解消に向けた組織的な指導を行う。また、情報機器に関連するトラブルでは、学年主任や各担任に今まで実際に起こった事例を聞き取り、より身近な問題として生徒同士で主体的に協議できるようにする。

③ 成果と課題

※12月2日から始める単元で、成果と課題については、まだ記載できないので、12月12日の研修時に、成果と課題を発表する。

④改善点

※12月2日から始める単元で、成果と課題については、まだ記載できないので、12月12日の研修時に、成果と課題を発表する。

第二期研修

【自身の授業改善の計画】

選択教科「自立活動」

1 単元の目標

- ①コミュニケーションの必要性を知る。
- ②社会的なマナーとコミュニケーションとの関連性を知る。
- ③円滑なコミュニケーションのために必要なことや、意識すべきことを学ぶ。

2 単元計画（全8回）

	月日	学習内容	生徒の活動	生徒の課題
1	9月5日 (木)	コミュニケーションの学習をする意義	・コミュニケーションとは何か、なぜコミュニケーションが必要かを知る。 ・社会的なマナーとコミュニケーションとの関連について知る。 (社会見学に向けて)	自分の言動や行動が他者にどう伝わるのか？理解して行動することが不足している。
2	9月30日 (月)	ろう者、聴者それぞれの立場から見たコミュニケーション	*実例 ・言葉の受け止め方について ・時間（集合時間・できるだけ早く） ・友達関係（ほどよい距離感）	・ろう者と聴者には受け止め方、感じ方の違いがあることを理解して行動すること
3	10月3日 (木)		・ろう者と聴者のコミュニケーションにおいてどんなことが起こりえるのか、またどのようにすればコミュニケーションが円滑になるのか、考える。（就業体験に向けて）	・自分が必要とする支援が何かを説明すること
4	10月31日 (木)	スマートフォン（LINEなどの連絡ツール）の使い方	・人には多様な感じ方、考え方があることを知る。 ・状況や表情、その人との関係性によって、同じ言葉でも伝わり方が変わることを知る。 ・相手に誤解されない表現をしたり、相手の言葉の意図を推し量ったりすることの大切さを知る。	・相手への配慮不足、語彙の不足などによるトラブルがあった。 ・コミュニケーションの齟齬は相手に原因があると考えることがある。
5	11月11日 (月)	日常生活の様々な場面における適切なコミュニケーション	・いろいろな生活場面における適切な行動について、グループごとに話し合いを行い、発表する。 ・直接の相手だけでなく、周囲の人への気配り、目配りという視点も盛り込む。	・現在1学年の生徒にとって課題であると思われるような場面を取りあげる。

3. 指導略案

学年 HR・自立活動（「コミュニケーション」）指導案

題 材	「コミュニケーション」の学習	担 当	秋保、秋川、秋山、加藤章、(藤)
日 時	9月 30日 (月) 1h	場 所	多目的ホール
指導計画	1 時間		
目標	・聴覚障害者や聴者間の挨拶や会話等の面で違いを理解する。 ・誤解されやすい例を挙げ、相手と良い関係を築くための方法を理解する。		
当 日 の 流 れ	学 習 内 容	留 意 事 項	
導入 10分	・挨拶 ・学習の目的を確認する。	・MTは手話で話し、ST(加藤、藤)が手話を読み取り音声を通訳する。 ・生徒によって情報保障が足りない場合、担任が近くで支援する。 ・「耳が聞こえない＝聴覚障がい」「耳が聞こえる＝聴者」の言葉の扱い方に注意させてから進める。 ・聴者との会話のズレの例を提示することで関心を惹きつける。	
展開 35分	○挨拶で大事なポイントは何か。 ・聴覚障がい者は目(顔)を合わせて挨拶するのが大事であることに對し、聴者は元気のよい声で挨拶することの2つの違いを理解する。 ○会話で大事なポイントは何か。 ・印象が良い面はどちらも(声や手の形を)はっきりすることであることを改めて確認する。 ・聴覚障がい者にとっては顔(目)を見ることが重要であっても、聴者にとってはそうでない場合がある面を理解する。 ○「挨拶及び会話等との違い」と「相手と良い関係を築くためのマナー」と関連し、誤解されやすい例を読み解く。 ・マナーの具体例を挙げ、生徒間でイメージが膨らむよう発言する。	・本授業はPP形式で進み、生徒はワークシートを持ち、書き込む時間を配慮する。 ・多くの生徒に発言できる機会を作る。 ・挨拶のイメージが持てるように、イラストを用いて提示する。 ・挨拶の仕方など、実際の方法については扱わない。 ・メモしている生徒がいた場合、とらせる時間をおく。 ・一般的なマナーからイメージを膨らませるよう発言させる。	

	・聴者及び聴覚障がい者同士ともに会話上、誤解されやすい単語を3つ紹介し、その単語(「しかたない」「かまわない」「普通」)に対してイメージを持たせるよう、考えたり発言する。 ○時間のマナーについて。 ・一般的なマナーとして時間を取り上げ、クイズ形式にすることで共有する。	
まとめ 5分	○本時の学習内容の振り返りと、次回の学習の予定の確認 (○今日の授業を受けて学んだこと、自分が意識すべきことを整理する。) ・挨拶 ・後片付け	(・時間が余れば取り組む。 ・ワークシートに記入する。)

◎教材教具・・・パワーポイント。ワークシート

4. 学習状況
一部抜粋(3～5 ページ)

5.今日の授業について

①今日の授業を受けて、特に学んだこと

日本は「察する文化」ということが初めて知った。
日本語の会話で「察してる文と察してない文が」あって
勉強になった。

〜(ということ)がわかった

〜(ということ)も知った

②気づいたこと

自分はへいきでも聴者には不快な音があるということ。

③これから気をつけたいことは何か

場面に応じて挨拶を変えたいと思った。
不快な音を出さないように気をつけようと思った。

①今日の授業を受けて、特に学んだこと

1. 時間のことです。

1. 9時10分前の時間に達することがわかった、

ついて、^{はん い}認識していたことと。
(考えた)

②気づいたこと

1. 会話をすることです。

1. 聴者の会話の^{には}道徳があることが気づいた。
マナーに

③これから気をつけたいことは何か

1. 聴者がコミュニケーション方法をしっかり会話すること。

→どのような会話?

どの
意味
から?

A: 聴者とコミュニケーションをとる時は
B: 聴者がコミュニケーションをとる時は
C: その他

①今日の授業を受けて、特に学んだこと

マナーについて

②気づいたこと

1. 聴者と聴者の違いについて

目を見ながら
声のメリハリ

③これから気をつけたいことは何か

1. 聴者と話すときは声のメリハリを付けて話したいと思います。

①今日の授業を受けて、特に学んだこと

聴者と発者の間の会話の違い

②気づいたこと

相手側についての使い方が自分が違っていたこと

③これから気をつけたいことは何か

言葉の使い方(主に聴者に対して)

①今日の授業を受けて、特に学んだこと

先生方から言われる「早め」は2〜3日間前とかがタタイということ。

「できるだけ」は最大限の努力をださることに。

②気づいたこと

質問された内容は答える前に何を質問されたかをしっかり考えること。

③これから気をつけたいことは何か

- ・相手がききづらいたりしないような言葉遣いで話す。
- ・相手の気持ちをしっかり理解する。

令和 6 年 11 月
実践交流「組織的な生徒指導のあり方Ⅱ」レポート

①北海道高等聾学校 秋保恵実子

【選択課題】いじめへの組織的な対応

テーマ設定の理由としては、前年度の勤務校では幼稚部であったが、今年度は高校生を対象に、指導内容及び技術も大いに学びながらも即時に対応が迫られると考えたためである。

○実践事例

6 月、A さんは様々な嘘をクラスの同級生に対して言い回っているため、同級生皆 A さんを信用できなくなり、嘘をついている行為に対し非難する様子があった。A さんは複雑な家庭の背景等で年齢よりも幼い実態があり、同級生からの理解が得づらい状況である。1 回目のクラスの話し合いで、今後の A さんの動きによって信用を戻す可能性に賭ける流れへ一度落ち着いた。

【成果】

副担任として H R や休み時間等関わる機会のみだが、生徒の表情によっては話しかけ数回やりとりをし、生徒の行動様相によっては、担任と情報交換及び指導方針を話し合った。

10 月には A さんの行動も落ち着き、嘘も少なくなってきた。意識をしているようで、普段の生活にもお互いお喋りしている様子が増えてきている。他の同級生から「今後期待しているから」と言って A さんと仲直りした報告があった。

【課題】

嘘やごまかす行為は完全になくなった結果には至らなかった。より深い認識のズレをなくす必要があった。

【改善点】

今まで行動してきた過程を第三者からどのように見られているかの話し合いを増やすべきか。しかし、その都度の行動を全部言語化し、視覚的教材や板画を使用しても限界がある。学校教育上からの面ではなく、他の面からのアプローチが必要である。

幼稚園 5 歳児らいおん組 話し合い活動 指導案

日 時：令和 6 年 1 月 2 8 日（木）
9：50～10：30

場 所：らいおん組教室

幼 児：男児 1 名 女児 1 名 計 2 名

指導者：宮木 沙絵

1 活動名：話し合い活動

2 扱いの趣旨

（1）幼児観

本学級は男児 1 名、女児 1 名からなる計 2 名の学級である。1 名は補聴器を装用し、音声でのやりとりを中心に、身近な大人とのやりとりを楽しみながらコミュニケーションを行っている。もう 1 名は、人工内耳を装用している。語彙の少なさから表現が拙いことはあるが、自分なりに知っている表現を使いながら詳しく伝えることができるようになってきた。

自分の考えや経験を表現する力や発言の内容をイメージする力の違いから、年中までは子ども同士でのやりとりではイメージを共有できず、指導者の介入を必要とすることが多かった。しかし、年長になってからは「B ちゃん」「C くん」と自ら友達に直接話し掛け、お気に入りのものを見せ合ったり、行事で楽しみなことを交流したりするだけでなく、それに対して「いいね」や「〇〇はこんなものも持ってるよ」等と返答し、やりとりが続くようになってきた。やりとりの内容がすれ違うことはあるが、互いにわかりやすく伝えようとしたり、相手の言っていることを自分なりに考えたりする等、相手意識をもって関わっている。

話し合い活動では、それぞれのペースに合わせた語彙の獲得や拡充を図りながらも、子ども同士のやりとりや相手を考える姿勢を尊重し、楽しくやりとりができることを目指していきたい。

（2）題材観

幼稚園では、幼稚園教育要領に定められた 5 つの領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）をバランス良く教育活動に取り組めるよう活動を設定している。その 5 領域の中の「人間関係」と「言葉」については、聴覚障がいによって形成されることが難しい領域であるため、聾学校幼稚園で最も育てなければならないコミュニケーション力に直結する重要な領域であると押さえている。そのため、意図的に話し合い活動を行い、コミュニケーション力の向上を目指している。

本学級の子どもたちは、人との関わりを好み、積極的にコミュニケーションをとっている。1 名は、好きなアニメや歌について話したり、空想の話や冗談を言って笑い合ったりするなど、興味や話す話題が多岐にわたる。もう 1 名は、鞆についているキーホルダーや手紙など、目にしたものを話題にすることが多いが、週予定に描かれた行事のイラストを見て、昨年度の経験を想起したり、自分の知っていることと関連付けて話をしたりすることができるようになってきた。それぞれの興味や盛り上がる話題が異なるため、話し合い活動で共通していない経験を話題にする場合は、話を深めるための指導者の介入が必要な場合もある。しかし、学校生活に関する話題やその場で共有できる具体物やイラストがある話題等については、子ども同士で話を膨らませながらやりとりを楽しむことができるようになってきた。そのため、子どもから出た話題を必要に応じて板画や動作化を取り入れたり、理解できる事柄と関連付けたりすることで、イメージを共有し、子ども同士のやりとりを深められるようにしていきたい。

（3）指導観

これまでの話し合い活動では、子どもたちが話したい話題を基に、行事に関する話題や自由遊びで起きた出来事、ハプニング等について取り上げてきた。特に行事に関する話題では、昨年度までの経験を想起したり、楽しみにしていること等を互いに質問し合ったりする等、子ども同士で話が盛り上がる場面が多く見られるようになった。

年中までは、イメージを共有できる事柄を選ぼうとするあまり、指導者から話題を提示することが多かったため、子どもに話題を尋ねても、思いつかなかったり、どちらか一方に偏った話題になったりすることがあった。しかし、話題を考える取組を継続し、話が盛り上がり、深まったりする経験を積み重ねたことで、最近では積極的に話題を提案したり、話に参加したりする姿が見られるようになった。

しかし、話題の途中でイメージがすれ違ったり、会話が滞ったりすると、子どもが気付く前に「伝わってないよ」や「ちゃんと見て」等と指摘したり、「〇〇したらいいんじゃない？」と次の展開を作ってしまったことが指導者の課題である。直接的な指摘や提案だけでなく、子どもが相手の様子や考えていることに気が付けるようにするための言葉掛けや、一方の子どもが発言に困ったときには、もう一方の子どもに委ねる等、子どもが主体となって解決できるような指導者の働きかけに留意したい。

3 グループ研究とのかかわり

【幼稚部グループ研究テーマ】

のびのびと表現しやりとりを楽しむことを目指して
～「関わり方の観点表」の活用を通して～

本研究では、幼稚部段階において大切な言語力は「自分の思いや考えを表現する力」であると考えている。この力を育むためには、子どもが自信をもって自分の思いや考えを伝えることができるよう、指導者が子どもの気持ちを丁寧に受け止めながら活動を展開することが必要である。自分の思いや考えが伝わる経験を重ね、やりとりが楽しいと感じることに繋げられるよう、気持ちの受け止め方や子どもの興味関心に沿った展開の仕方に留意したい。

先日の子二研では、3－（6）「話や質問の意図が理解できないときは、他の子どもに話を振ることで、友達や指導者の発言から手がかりを得られるようにする」が課題として挙げられた。子どもが意図を理解できなかったり、すれ違ったりしたときには、友達の意見を聞かせたり、友達と指導者のやりとりを見せたりする機会を設け、子どもが自ら気が付くことができるような進行の仕方に留意したい。

4 本時の目標

- 自分の思いや考えをわかりやすく伝えようとする。
- 発言の意図を自分なりに考えながら聞く。

5 本時の展開（予想される一例）

幼児の活動	指導者の活動	指導上の配慮事項
○話したい話題を考える。 「○○あそびのこと！」 「こないだいった△△のはなしがしたいよ。」 「すもうの話がしたいよ。」 ○話題に関連して話したり、友達の意見を聞いたりする。 「○○ちゃん(くん)は、どんなことしたの？」 「わたしは△△したよ。」	○話したい話題を引き出す。 「今日は何のお話をする？」 ・子どもから出た発言を取り上げ、話題を展開させる。 「○○くん(ちゃん)は何の話がしたいかな？」 ・発言がなかなか出ないときには、友達が話したいことをイメージさせたり、周囲に注目させたりする。 ○話題を共有する。 ・話がすれ違ったり、理解に困ったりしたときには、もう一方の子どもに話題を振ったり、状況を考えさせたりする。 ・子どもの考えを揺さぶったり、反対の意見を言ったりして、子どもが考える機会を作る。	・子どもの気持ちや考えを共感的に受け止める。 ・子どもの表現を適切な表現に置き換えて代弁し適宜口声模倣や動作模倣を促す。 ・必要に応じて子どもの考えを板画したり動作化させたりして、話題を共有できるようにする。
【予想される話題例】 ○子どもから出された話題例 天気のこと・怪我のこと 持ち物のこと・家族のこと 他 ○ハプニング	・ハプニングや子どもが話したい話題を優先する。子どもの話し合いたいという気持ちを大切にする。	

6 本時の評価

- 自分の思いや考えをわかりやすく伝えようとしたか。
- 発言の意図を自分なりに考えることができたか。

7 幼児の実態と本時の目標

※個人情報のため、掲載していない。

1. 共感の仕方や気持ちの受け止め方がわからない

- (1) ハイタッチをしたり、抱き合ったりするなど、発達段階に応じたスキンシップを取り入れながら、喜びを分かち合う。
- (2) 子どもの感情の変化に合わせて、共に笑ったり、悲しんだりする等、見てわかりやすい表情をする。
- (3) 子どもが楽しくて指導者と視線を合わせたときや訴えかけてきたときは、その遊びや動きを真似ること、楽しい気持ちや要求が伝わっていることを伝える。
- (4) 視線や指さしで訴えかけたときには、指しているものの近くへ行き、子どもが伝えたいことを明確にする。
- (5) 子どもが視線や指さしで表現したことを簡単な言葉や表現で代弁する。
- (6) 子どもの表情や動きに合わせて、気持ちや考えを代弁する。特に、驚いたり、発見したりする等の感情が大きく動く場面を見逃さないよう、子どもの表情や動きの変化に注目する。
- (7) 子どもの要求は、その気持ちを代弁してから、指導者が要求を受け入れたことを伝える等、一人二役の話し掛けをする。
- (8) 活動中や規律性のある事柄に対しては、子どもの気持ちを受け止めながらも、ルールや適切な行動を伝えたり、一緒に考えたりする。
- (9) 子どもが自分の感情を上手く言い表せないときは、その気持ちに寄り添いながら、考えを整理することで、感情を表現できるようにする。また、必要に応じて指導者の思いや考えを伝えることで、受け止めてもらえたことが実感できるようにする。

2. 子どもの伝えたいこと、考えや気持ちの引き出し方がわからない

- (1) 子どもの伝えたいことがわからないときは、曖昧にせず、指導者が理解しようとしていることを伝える。
- (2) 視線や指さしで訴えかけたときには、指しているものの近くへ行き、伝えたいことを明確にする。
- (3) 写真や絵カードを提示したり、イラストに表したりして、伝えたいことを明確にする。
- (4) 具体物やイラスト等を手渡し、実際に操作させる。
- (5) 動作化を促したり、絵に描いてもらったりする等、子どもの考えを言葉以外の方法で表現させる。
- (6) 発問ややりとりを通して、子どもの話したいことを具体化したり、整理したりする。

3. 子どもに指示が通らない/話の内容が上手く伝わらない

- (1) 子どもの実態に合った指示や話題であったかを見直す。
- (2) 指導者の話す速度や声の大きさ、使用していることば等が適切であるかを見直す。
- (3) 子どもの視線が指導者に向いているかを確認する。指導者から視線が逸れるときには、声の抑揚や表情に留意したり、教材の提示の仕方を工夫したりして、注目を集めるようにする。
- (4) 子どもが理解できる表現を使っているか、話が長くなっていないかを確認し、端的に伝えるよう気を付ける。
- (5) イラストや写真、具体物等、視覚的教材を使用し、子どもが話の内容をイメージできるようにする。
- (6) 話や質問の意図が理解できないときは、他の子どもに話を振ることで、友達や指導者の発言から手がかりを得られるようにする。

4. 子どもに伝わっているか不安で話しすぎてしまう

- (1) 指導者の説明は端的に行い、子どもが理解できているかどうかの確認を丁寧に行う。
- (2) 具体物やイラスト等を手渡し、実際に操作させて理解の確認をする。
- (3) 動作化を促したり、絵に描いてもらったりして、理解の確認をする。
- (4) 指導者がわからないふりをしたり、意図的に誤ったことを言ったりすることで、子どもの理解を確かめる。
- (5) 子どもが考える間を設けたり、表出を待ったりするなど、余裕をもって進行する。
- (6) 子どもが困っているときは、指導者の一方的な説明ではなく、子どもが自分で考えられるよう、追加で発問したり、子どもの考えが整理できるようにやりとりしたりする。

5. 子どものことばが少ない/ことばの定着が難しい

- (1) 子どもの実態に合ったことばを提示しているかを確認する。
- (2) 指導者が多様なコミュニケーション方法を使うことで、子どもが様々な伝え方を獲得できるようにする。
(音声、手話、身振り、指差し、絵カード、イラスト等)
- (3) 子どもが視線や指さしで表現したことを簡単な言葉や表現で代弁する。
- (4) 子どもの表情や動きに合わせて、気持ちや考えを代弁する。特に、驚いたり、発見したりする等の感情が大きく動く場面を見逃さないよう、子どもの表情や動きの変化に注目する。
- (5) 子どもの要求は、その気持ちを代弁してから、指導者が要求を受け入れたことを伝える等、一人二役の話し掛けをする。
- (6) 身に付けさせたい言葉は、日常生活で使用する場面を意図的に取り入れる。また、家庭にも日常のやりとりや絵日記で扱ってもらうよう支援する。

6. 子どもと視線が合わない

- (1) 子どもの視野や見えやすい環境であるかを確認する。
- (2) 子どもの興味や視線が逸れたときには、子どもの興味のある遊びで注目をひくようにする。
- (3) 指導者が子どもの視線に入り、子どもが視線を合わせることに気が付けるようにする。
- (4) 相手を見て話したり、聞いたりするよう促し、できたときには大きく賞賛する。
- (5) 視線が合うまで待ち、合ってから話し始めるようにする。
- (6) 子どもの視線が逸れているときには、見るべき相手を知らせたり、考えさせたりする。
- (7) 話し手から視線が逸れたり、最後まで見ていなかったりしたときには、話の内容を理解できているかを確認し、見ることの必要性やわからないことの困り感を感じられるようにする。
- (8) 子どもが視線が逸れていることを理解できないときには、その状況を再現したり、イラストに表したりすることで、自分の状況を客観的に捉えられるようにする。

7. 子ども同士のやりとりが少ない

- (1) 子ども同士が話しやすい環境であるかを確認する。(座り方、椅子の向き等)
- (2) 指導者が多様なコミュニケーション方法を使うことで、子どもが様々な伝え方を獲得できるようにする。(音声、手話、身振り、指差し、絵カード、イラスト等)
- (3) 子ども同士が関わり合える活動を意図的に設定する。
- (4) 話し手に注目できているかを確認したり、促したりする。
- (5) 友達に直接伝えるべき内容を指導者に訴えてきたときには、友達へ伝えるよう促す。
- (6) 子ども同士で関わるべき場面では、指導者が先回りせず、自ら伝えるのを待ったり、その場の様子を伝えて反応を伺ったりする。
- (7) 相手に上手く伝わらないときには、適切な伝え方を提示したり、一緒に考えたりする。
- (8) 友達からの声掛けに困惑しているときには、相づちの仕方や適切な返し方を伝えたり、一緒に考えたりする。
- (9) 子ども同士で円滑にやりとりができているときには、介入を控え、見守るようにする。

8. 指導者の言葉掛けを復唱してしまう

- (1) 口声模倣を行うときには、「真似をしてね」と伝えてから話したり、話の最後に合図を出したりする等、約束を作り、発問や会話と口声模倣との区別がつきやすくする。
- (2) 発問や口声模倣を区別できないときには、正しい答え方をイラスト等に表して、視覚的にわかるようにする。
- (3) 子どもが何に困っているのかを明確にして、正しい答え方を共に考えたり、示したりする。
- (4) 正しい答え方を示したときには、やりとりをその場で再現し、正しく答えられるかを確認する。
- (5) 子どもが返答に困ったやりとりは、その後同じようなやりとりができる場面を意図的に設定し、定着を図る。
- (6) 話し手の意図を汲むことができるよう、発問や会話の仕方を工夫し、様々なやりとりに慣れるようにする。

9. 口声模倣のかけ方がわからない

- (1) 子どもの反応や表情の変化に合わせて、気持ちに合った表現を代弁する。
- (2) 子どもが身振りや簡単な手話を使ったり、指導者の模倣をしたりすることができるようになったときは、気持ちを代弁した後に模倣を促す。
- (3) 子どもの曖昧な発言や表現は、言葉を加えたり、適切な言い方に置き換えたりして、口声（動作）模倣を促す。
- (4) 伝えたいことがまとまらないときには、子どもの考えを簡潔にまとめて、口声（動作）模倣を促す。
- (5) 子どもが覚えられないときは、文節数を指で表し、1文節ずつ確認したり、文章を板書したりする等、見て理解したり、確認したりすることができるようにする。
- (6) 口声模倣をすることで、子どもの話したい意欲を欠くことがあるため、活動の中で気持ちや考えを引き出す場面と正しい文章で話す場面を精選する。

10. 口声模倣が実態に合っているか不安である

- (1) 自発的表現が少ない子どもには、動作模倣を促す。
- (2) 指導者の声真似をするようになってきたときは、動作に合わせて発声を促す。
- (3) 音韻意識が育ってきたときは、言葉の長さやリズム、イントネーションを模倣させる。
- (4) 発声に口形が伴ってきたときは、母音口形を模倣させる。
- (5) 両唇音を模倣させる。
- (6) 2～3音節の単語を口声（動作）模倣させる。
(4、5、6、7音節、それ以上)
- (7) 拡充模倣をして、文章で口声（動作）模倣をさせる。
(2、3、4、5語文、それ以上)
- (8) 口声（動作）模倣している言葉や文章を想起して再現させる。

11. 子どもの発音が曖昧だったり、イントネーションが違ったりする

- (1) 文字や指文字で確認する。
- (2) 発音サインを提示したり、口形文字を記したりして、意識して発音ができるようにする。
- (3) 肩をたたいたり、手拍子をしたりして、正しい音韻やリズムを伝える。
- (4) 正しいイントネーションを板書した文字の大きさや高さを変えて視覚化し、わかるようにする。
- (5) 発音やイントネーションを確認した言葉は、単語だけでなく、文章でも正しく言えるかを確認する。
- (6) 発音やイントネーションを確認した言葉をその後の会話で使う場面を意図的に設定する。

実践シート

9月5日(木) 活動名: 朝のおはなし(5歳児)		
○展開されていた話題 C児からの提案で翌日に行われる遠足について話し合っている場面である。B児の「おやつ何を買うか決まった?」という発言に対して、C児は「決まった」と答えるが、質問の意図が理解できず、なかなか質問に対しての適切な回答をすることが出来なかった。		
子どもの表現	教師の働きかけ	関わり方のポイント
B: Bちゃんもきまったー! C: きまったー! C: みんな/楽しい(嬉しい)/時/おいといて/楽しい(嬉しい)/交換/選ぶ/どうぞ C: おやつ/食べる/交換 B: モチモチハイチュウのももあじと、コロロ! C: C/マリオ/新しい/持ってくる/ありがとう/わぁ!(びっくり)/時/2つ目/グミ C: うん/マリオ/グミ/好き	Cくん、さっきさ、「おやつ2つ決まったー!」って。 って、言ってたよ。 先生はね、決まってないい。 決まったんでしょ? 何を買ったの? (受け取った振りをして)これ何? うんうん、おやつ交換するのね。わかったよ。 じゃあ、Bちゃんのおやつはなに? コロロ? あ、グミだ! 先生もそれ大好き、交換しようね。 うんうん、それはマリオの? マリオのグミ? ってことは、Cくんのおやつは「マリオのグミを買ったよ」なんだ? もう1回ね(口声模倣を促す)	○B児からの質問に合う回答ではないが、C児が「おやつ」というキーワードから連想して発言したため、その発言を取り上げて、B児に話題を振ることで答えを引き出そうとした。 ○口声模倣を繰り返した後、B児の質問を再度提示することで、質問に対する答え方の定着を図ろうとした。
○今後に向けて 3(6)話や質問の意図が理解できないときは、他の子どもに話を振ることで、友達や指導者の発言から手がかりを得られるようにする。 過去の経験を想起したり、関連付けたりすることが難しい子どもには、追加発問や言葉掛けを繰り返し過ぎず、他の子どもに話題を振ることで、その意見を参考に考えたり、答えたりすることができるようにする。また、そうすることで、話題を1人に偏らせず、学級全体で話し合うことができる。		